



<1. 神の御国のための働き人を探しておられる神様>

本文1節は神の国についてのイエス様の教えですが、働き人を探しに出かけたぶどう園のたとえ話として、主人なる神の御心がよく表されています。つまり、ここで、ぶどう園は神の御国を意味し、ぶどう園の主人は神様を意味しています。神の国に入れる者、また神の御国のために用いられる働き人を探すために出かける主人の姿を通して、この世と違う神の御国はどんなところであり、その御国にはどんな者が入れるのか、またその御国の民として、用いられる人の相応しい生き方についてよく知る事ができます。

イエス様の時代も、今日もイスラエルでは9月末ごろになると、ぶどうを収穫する時期であります。その後、もうすぐ雨期(うき)が近づきますから急いで収穫をしなければなりません。そのため、ぶどうの収穫の時期はいつも人手が足りなかったのです。そのため、ぶどう園の主人たちは人たちが集まっていた市場などに行って働く人を探しました。

愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさん、聖書によると、我々は最後の収穫の時代に生きていますと教えて下さっています。ヨハネの福音書4章35節でイエス様は「**しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。**」と言われました。「**そして彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」**」(ルカの福音書10章2節)

今の時代は福音を聞いた事のない人々が歴史上一番多い時代だと言われています。全世界の70億の人口の中40億以上の人々は生まれてから死ぬ時まで一度も十字架のイエスキリストの罪赦しと救いの福音を聞いた事がないようです。彼らには何の選択肢もなく、放置されたまま、本当の救いの道がある事さえ分からず、永遠の死に向かっている人々がどれほど多いのか分かりません。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネの福音書3章16節)

尊い一人の魂も滅んでほしくない天の父なる神様の御心はどうでしょうか。また、福音を聞いてもまだ信じる人たちが少ないし、少ない主の教会が力強く立てられて行くためには、さらに主の御心を知り、神の国の主の働き人たちが必要とされている時期でもあります。主イエスキリストは今収穫の時期として、ぶどう園の主人の切なる心をもって働き人を呼んで下さっています。

「ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから。」(コリント人への手紙第一15章58節)

<2. 今日の聖書の本文>

今日の本文に戻りますと、ぶどう園の主人は朝早く出かけて一日(朝)一デナリの日当(にっとう)を約束し、働き人たちをぶどう園に入れました。そして、**3時(朝9時ごろ; 3節)、5節には、6時(正午12時)と9時(午後3時)にも、市場で何もしないで立ってうろろしながら遊んでいた人々を受け入れ、ぶどう園で働かせました。**

ところが、**6節**を見ると、主人はまた**午後5時ごろ**、市場に出かけました。行ったら、**もう日が沈んで一日が終わろうとしていてもまだ一日中ずっと何もせずにぶらぶらしていた人たちが**いたのです。主人が彼らに問いました。6-7節を見て見ましょう。

「6また、五時ごろ出て行き、別の人たちが立っているのを見つけた。そこで、彼らに言った。「なぜ一日中何もしないでここに立っているのですか。」7彼らは言った。「だれも雇ってくれないからです。」主人は言った。「あなたがたもぶどう園に行きなさい。」」

信じられない姿であり、ありえない出来事ではないでしょうか。大体すべての仕事が終わる6時まで、後一時間しか残っていないのに、**も関わらず主人は働き人たちを招いて下さっているのです。ここでも主人の哀れみの心、恵みの心**が現われます。

間もなくもう一日が終わって、一日の日課(にっか)が終わりました。問題はここから起こります。日が沈む6時ごろ、朝から動かせないほど疲れた体でしたが、働き人たちは主人から一日の賃金、その日当をもらえる事に嬉しく集まって来ましたが、そこで思わぬ不平不満の声が聞こえて来ます。

8節によると、最後に終わる1時間前に5時ごろ来た者から、最初に来た者たちにまで、賃金をもらいましたが、最後の5時に来た者も、朝9時から来て一日働いた者もみんな同じ一人一デナリずつでわたして下さった事で、主人に向かって文句を言い張ったわけです。

最初市場で呼ばれて仕事を始めた時の感謝も、喜びも消えて、ただ主人や他の働き人たちに対してこき下ろす事になってしまった理由は何でしたか。それに対して、つぶやきながら恨んでいる彼らを叱りながら、**16節**に主人はこう言われました。

「このように、後の者が先になり、先の者が後になります。」と言われた主のお言葉の意味は何でしょうか。

<3. 今日の本文の背景>

今日の本文をもっと正しく知るためにはその背景を知る必要があります。**マタイの福音書19章27-30節**です。ある日、イエス様の一番の弟子であるペテロがイエス様に来てとっても率直な質問をします。**27節**を見てください。

「そのとき、ペテロはイエスに言った。「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。それで、私たちは何をいただけるのでしょうか。」

ペテロはイエス様を信じて従いながら、見えない永遠の命への約束だけでは満足できませんでした。神の恵みによって、選ばれ、

ここまで用いられ彼の生き方や人生の方向が変わっただけでは満足できませんでした。つまり、ペテロは肌(はだ)で感じるほどの計算上のプラスが欲しがってました。今まで主イエスキリストのために頑張っただけで仕え続けながらここまで来たので(Give)、具体的な主イエスキリストからの(Take)、何かの補償や報いがなければならぬと思ひ込んでいました。

愛するみなさん！ 今日例え、わたしが今まで日曜日にどれほど時間をささげ、お金をささげ、体をささげ奉仕やって来たり、教会で仕えて来から、何か神様がすぐ見える祝福の結果として与えるべき、むくわれるべきではないかという考えはないでしょうか。たとえば、今まで主のため仕えて来た結果、子どもが望んでいた受験の学校に降格するか、株式が急に上がるか、くじでもあたるべきではないか。これがまさに人間としての取引意識ではないでしょうか。

当時、イエス様の弟子たちの中ペテロは誰よりも熱心にイエス様の弟子として頑張りましたが、このような自己功労意識、取引意識に陥られた瞬間、信仰の危機を招いてしまいました。そのように考え始める瞬間、なんとなく自分のすべて、今まで損して来ていると感じ始めたわけです。つまり信仰の危機が訪れました。その時、イエス様は何とおっしゃいましたか。**マタイの福音書19章29～30節**にはかならず、幾倍(いくばい)も、百倍も報われる事とまた永遠のいのちを受け継ぐと約束されました。

「また、わたしの名のために家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」しかし、30節に**「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」**教えながら主はこのように人たちはもう後の者になるしかない、つまり、もうそのような人たちは神のためには用いられる事はないということをも言われました。(*弟子たちやユダヤ人たちに注意をさせる御言葉 * 神の救い人脈・お金ではない * イエスキリストを信じるため伴う犠牲や苦しみにならず神の報いはあること)

そして、イエス様はそこで終わるのではなく、ペテロや弟子たちも含め、主の者たちが後にならず、さらに神の御国の相応しい働き人として用いられるように次のぶどう園の働き人のたとえ話を語って下さったわけです。その意味では今日我々はイエス様のこの御教えを通して、主の教会での奉仕者や働き人として、どんな心構えと姿勢で働き、仕えるべきであるか学ばなければなりません。愛するみなさん、ぶどう園の主人の心に合わせた相応しい働き人の姿は何だと思ひますか。主の体である教会での奉仕者、働き人としてどんな姿勢を取るべきでしょうか。

<4.神の御心に相応しい働き人になるためには >

①比較意識を捨てなければなりません。

「最初の者たちが来て、**もっと多くもらえるだろうと思った**が、彼らが受け取ったのも一デナリずつであった。」(10節)

「彼らはそれを受け取ると、**主人に不満をもらした。(ギリシャ語(エゴンギソン): 誹謗し続ける・文句を言い散らし続ける)**」(11節) 11節で**「不満をもらした」**の原語は**未完了形**で**「誇(そし)り続けている、”ひそひそとつぶやき続けている”**という意味であります。これが未完了形で使われたということは**主人に対して何度も繰り返してつぶやいたという事**を表しています。この単語は**イスラエルの民が出エジプトしてから荒野で難関にぶつかった時、モーセと神様に対抗してつぶやいた時、使われた単語と同じ意味です(出エジプト15:24,16:7,8)**。彼らは一日中労苦した事を主人が気づいてくれないのだと思ひ込んでました。

『**最後に来たこの者たちが働いたのは、一時間だけです。それなのにあなたは、一日の労苦と焼けるような暑さを辛抱した私たちと、同じように扱いました。**』(12節)

働いた人たちの中で今主人を非難し、不満や文句を言っている人々はだれですか。10節によると、**「最初に来た者たち」**でした。彼らは一番最初に、朝9時から来て一日中ずっと厳しい暑さに耐えながら、疲れながら一日中働いた働き人たちでした。

ここで**「労苦」**は病気などで**「押さえつける苦痛」**を言う時使う単語です。自分たちは一日中息苦しいほどの苦痛を耐えながら働いたのにそれに対する代価は当然、後で来て1時間ぐらいしか働いた者たちが一デナリをもらったのであれば、自分たちは**「もっともらえるだろう」**と思ひ込んでいたでしょう。

今日のわたしとみなさんも、最初に来た者であったならば、まったく同じ反応をしなかったと思ひますか。今日この世と社会の基準で見ると、当然最初に来た者の労働(ろうどう)の時間や勤労の基準で考えれば、1時間働いた者と一日中働いた者の賃金が同じであることはむしろ、大間違いであり、違法だと言えるかも知れません。この世の基準で見れば、まったく正しくないのです。

<神の招きを聞き入れ、すべての人生に神の救いと御国を与えようとしておられる慈しみ深い父なる神様>

しかし、ここで、神様と人の違さ、神の御国とこの世の違さが明らかになることが分かります。

人の観点で見れば、この世の基準で見れば、労働基準で、もっと多く働いた人が多くもらって、働いてない者はもらえないことは正しいことでしょう。法律を違反したり、罪を犯したことに對し、当然それに対する罰金や犯した罪の分賠償したり、償うべきことが当然なことです。

もちろん、正義なる神様、聖なる神様も罪に報いて下さるお方であり、裁かれるお方ではありますが、神の救いと赦しの基準で見れば、違ひます。神の御国の基準で見ると、すべての人生に希望があるのです！

なぜなら、我らが信じるすべてを造られた創造主の父なる神様は、哀れみ深く、慈しみ深く、愛と恵みに満ちておられる父なる神様であられるので、どんなに過去があり、どんな罪深い人生であり、いくら神様に対して頑な心で、頑固(がんこ)で、イエスキリストを背き、人生の最後まで神様を否定した者であっても、地上での命が残されている最後まで、最後の最後までそのたましいを救うために、神の御国に入れるように、そのたましいを招いて下さり、待っておられるお方であられます！**すべての者たちに同じく救われ、神の御国に入れる機会を公平に与えて下さる神様であられることが分かります。**まるで父に無礼で、どんなに親を侮辱かけて家を離れた放蕩息子であっても、家に帰って来た時に、喜んで迎え入れ、すべてを赦し、いつものようにすべてを回復させ、満ちたして下さる父なる神様であられることを放蕩息子の例えを通してイエスキリストは教えて下さいました。

今日ぶどう園の主人のように、もう十分だと、もうおしまいだと終わらず、最後の一時間まで、さまよっている人生を探し出し、彼ら

を救おうとしておられる姿で神様の熱心を気づきませんか。

5時に呼ばれた人の立場でみなさん、考えてみましょう。

もう今日もまったく働けず、今日も一日自分や自分の家族さえも、食べることがなく、絶望であきらめていた人に、残り1時間でも働けるチャンスを与えて下さっただけではなく、1時間ぐらいいしか働いてなかったのに、一日の日当の一デナリまで頂いた人はどれほど、感謝し、喜び、救われた人生でしょうか。

<一方的な神の愛と恵みの負い目の信仰と応答としての奉仕 >

神の愛と恵みによって救われて、また主に喜ばれ、用いられる働き人は神の愛と恵みの負い目を忘れず、その応答として働き、使えます！

ぶどう園に朝9時に、早くから主人と約束し、働いた人々も、最初、自分たちが一デナリを約束され、働いた者たち(2節)でした。しかし、彼らは働いた後、賃金をもらってから市場で遊んでいた自分たちを呼んでくださった主人への感謝を失ってしまいました。彼らはもともとどんな人たちでしたか。彼らはもともと自分の立場や状況を失っていた事が本当の問題の始まりでした。朝9時から来た人たちも、12時に来た人たちも、3時や最後に5時に来た人たちの同じ共通点がありました。何でしたか。3節を見ると、「彼はまた、九時ごろ出て行き、別の人たちが市場で何もしないで立っているのを見た。」

6節の後半を読んでみると、「そこで、彼らに言った。「なぜ一日中何もしないでここに立っているのですか。」

どんな単語がくりかえされていますか。「何もしないで」です。

我らは彼らは主人に声かけられる前にどんな状況におかれていたのか覚えなければなりませんでした。

6節～7節「6そこで、彼らに言った。「なぜ一日中何もしないでここに立っているのですか。7彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』主人は言った。『あなたがたもぶどう園に行きなさい。』」

つまり、彼らは先に呼ばれたか、後で呼ばれたのかだけで、実は関係なく、主人が呼んで下さる前までは、みんな自身の力でどうしようも出来ず、だれかの助けがなければ、自分が救われない状況に負われていたのです。それで、何もやらないで人生を虚しく、何の希望もなく、絶望の中で人生の浪費しながら、日々を何とか過ごしていた人たちでした。これはどんな意味でしょうか。

イエスキリストは罪の中で自分の力では救われず、人生の真の生きる意味も、方向も知らず、さまよっていた人たちを救い出してくださいました。彼らからではなく、一方的な主の恵みのゆえに神様が我々を選び、呼び出し、救い出してくださいました。これがまさに恵みではありませんか。罪赦され、救われただけでも、感謝なのに、さらに神の御国のために東特用いられる人として受け入れてくださいました。

これもまた一方的な恵みではないでしょうか。そうです。ところが、自分に与えて下さった計り知れない神の恵みと信仰を失ってしまう時、残るのはまるで絶えず、比較意識や取引意識見たいな事に捕らわれがちです。今まで自分がどれほど苦労しながら、頑張つて、熱心に働いたのか他の人たちと比較しながら、自分の功労意識しか残らなくなってしまいます。まさに、その瞬間から先になった者が後になる者への危機に落ちてしまうケースです。

早くから来た働き人の場合は、後で来た人たちよりもっと苦労したと言って、主人への負い目も忘れてしまいやすいと思います。

ですから、彼らは主人に不満と文句をつけたのです。みなさん! 我々はキリストの大きな恵みと愛を受けました。イエス・キリストの血潮により、罪赦され神様の子どもとされました。受け入れられただけではなく、神の国、教会、栄光のために用いられている主の働き人や奉仕者になられたことがどれほどの祝福なのでしょう。いくら我々が熱心に努力し、仕えても我々の罪を赦し、永遠に滅びる我々を救うために十字架で血を流したイエスキリストの恵みと救い、用いて下さる主の愛の恩返すことができるでしょうか。

偉大な使徒と呼ばれたパウロは一生自己功労感に捕らわれないように言動に慎みながら、神の恵みに負い目ある人生である事を主と人々の前で忘れないよう必死だったように見えます。ローマ人への手紙1章14節で、「私は、ギリシャ人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも、負い目のある者です。」と告白しています。

ある記録によると、我々の以前の信仰の先輩たちは祈るたびに最後に“主の御前で何の功労のないこの罪人が恐れ多く主イエスの御名によってお祈りします。”もしくは“ただ、イエス様の恵みの功労によってお祈り致します。”とよく祈られました。

<救われた者の注意点:比較意識>

ここで我々が注意しなければならないことが見えます。それは、最初来て働いた彼らの心には、後で来た人をじっと見つめながら比較していたため、自分たちを呼んでくれた主人への感謝と恵みをすっかり忘れてしまいました。ここで主の御心に適う働き人となるためには、まず自分の中にある比較意識を捨てなければなりません。人を見ながら働くと必ず比較しながら、優越意識、自己功労意識、あるいは被害意識に陥りやすいので、いつも警戒し、気をつけなければなりません。

愛する信仰の家族のみなさん!たしかに、他人と比較する時、いつの間にか今まで頂いた恵みをすぐ失い、主への感謝はなくなってしまい、つぶやきばかりしか出なくなります。事実、当時働くことすら難しい時代、働き人はもともと仕事もなく、今日も食べるのも、生きる希望もなく、遊んでいた人だったのではないのでしょうか。その人に、主人は手を差し伸べ、選んで一デナリの賃金を約束されて、約束の通り、主人から一デナリをもらったので、彼らがつぶやく理由は無いはず。きっと選ばれた時、そして働いていた時も感謝するばかりの心だったのではないのでしょうか。

主人の話を聞いてみてください。「しかし、主人はその一人に答えた。『友よ、私はあなたに不当なことはしていません。あなたは私と、一デナリで同意したではありませんか。』」(13節)

今日、救われた神の愛と恵みに感謝し、奉仕をしながら、後でほかの人と比較したり、比べてしまいそうになる時を気をつけたいと

願います。特に周りの人々がよく頑張っている自分より認められ、自分より優れたと思う時、大事にされたり、重要な役割が任されると自分とよく比較してしまう時があります。当然、教会においても起こりやすい現象でしょう。

“あの人には神様があんなに恵みをくださったのに、なぜ私にはくださらないのか”、“あの人はいまいちなのに教会であんなに大事にされているのか”など。。。

むしろ、自分に与えられた一デナリに感謝し、満足しながら、後に来た人々も同じく一デナリをもらえる事を心から喜んであげるなら、ぶどう園の主人なる我々の神様はこのような働き人をさらに愛し、かならず一度だけではなく、続けて多く用いて、報いて下さると信じます。

我々はこのような比較意識をどうやって捨てて、それを克服できるのでしょうか。比較意識の聖書的処方方は創造信仰を持つ事であることが分かります。神様が我々を創造されたとき一人も同じように造られなかった事です。顔も違い、個性も違い、気質も違い、賜物も違い、ですから、人生の行く道も、神様からの各使命も当然同じではないことです。それぞれ自分だけの独特(どくとく)の使命(しめい)があるということです。

神様は、取るにたりない私たちを救うために、ご自分のいのちを犠牲にされたことは、私たちが認められたということです！

神様は、私たちがありのまま受け入れて下さいました。だれもわかってくれなかった私たちを、神様は心に留めて下さいました。神様が私たちが認めて下さる時、私たちに何も要求されません。認められるために努力をしなくても、神様は私たちが完全に認めて下さったのです。ただし、その神の恵みを続けて味わうためには、自分は神様に認められるだけの価値がない存在であったという事を認めることです。人に認められたいという欲望を手放し、私たちが認めて下さった神様に立ち返るなら、私たちの渇きが満たされると信じます！

現代人の不幸は勉強基準、働く評価、働きの成果基準を、画一化(かくいつか)させようとしています。自分と違うことが間違いではない事を覚えましょう。あなたのやり方を他の人々に強制しないで下さい。まねしようとしなくて下さい。そうなると、比較することも嫉妬することもなくなるでしょう。

神様があなたにのみに許された今の人生を受け入れ感謝し楽しんでください。そして、みなさんとタイプが違った隣人がみなさんのとなりにいることを悩まないでむしろ感謝してください。比較意識の奴隷となるとその瞬間からすでに我々は後になった者の道を歩むことになると思って下さい。

<神の家族共同体や同労者(どうろうしゃ)信仰を保ちましょう>

ぶどう園に朝から来て働いた人々には、一つの家族共同体や同労意識がありませんでした。自分たちがどれぐらいもらったのかだけに関心があって、毎日同じ働きをしながら日当を受けないと生活をできない同じ苦勞する立場、同じ大変な状況や身分を考える一緒に働く者に対する同僚意識さえもまったくありませんでした。彼らが主人に文句をつけた理由はここにありました。彼らには同労者意識より競争意識が強かったからです。こんにちも同じです。我々の社会はお互い助け合う同労者、共存(きょうそん)する意識よりは競争意識が満ちている社会で住み、働いています。そこで自分が勝つか、負けるかがまるで人を評価する価値基準見たいに、上に立った者たちのみが成功し、幸せな者みたいになっているのではないかと思います。

しかし、神の教会ではこの世と違って、競争より神の家族としての共同体信仰、同労者信仰と意識をしっかりと保たれるように勧められています。競争するよりむしろ協力し、補い合い、助け合い、仕え合うことを教えて下さっています。ぶどう園に早くから来て働いた人々が後で来た人々を共同体意識、同僚、同労者さえあったならば、文句は言わなかったと思います。ところが、**13節**で主人が文句を言っている人々に“友よ”と呼んだことを注目して下さい。これは“同僚”(companion)という意味もありますが、もっと深い意味として“戦場での友”(生死と運命を共にする:fellow-soldier)を言う時も使う言葉です。つまり、命をかけて支え合い、ともにする運命を一緒にする者という意味です。ですから、信徒の間に一つの神の信仰と愛の家族共同体、一人だけではなく、共に働く同労意識が強い時こそ、その教会はかならずさらに元気よく、調和され共に建てられて行けると信じます。

みなさんもよくご存知のイソップ童話の話の中で、ある主人に一頭の馬とろばがいました。ある日、旅立っている道中馬とろばは主人の荷物を背中に背負って旅立ちました。一日中歩いて夜遅くやどやに着いて、翌日の朝早く旅を始める苦しい何日かが続きました。ある日体が弱いロバが限界を感じ馬にお願いします。“馬さん。私をちょっと助けてちょうだい。このままだともう死んでしまいそう。なので、私の荷物をすこし持ってほしいけど是非お願いっ！”ロバは息苦しうに馬に哀願(あいがん)しました。すると馬は冷たく即座(そくざ)に断ります。“ダメ。。おれも死にそうなんだから。おまえの荷物まで背負うなんて、もう無理だよ。”

ロバはそれ以上頼むことができず、結局倒れて死んでしまいました。すると主人は早速ロバが背負っていたすべての荷物を馬の背中に全部背負わせました。それだけじゃなく馬はなくなったロバまでも背負って行かなきゃなりません。結局馬はもっと重い荷物を持たせることになってしまいう事になってから後悔したという話です。

愛する信仰の家族のみなさん! もしロバが大変でお願いした時、少しも助けたなら、どうなったと思いますか。結果的に、馬は主人にロバを失わせ、自分もさらに重い荷物を背負わせることになってしまいました。このように馬のような信徒たちや教会にならないように気を付けましょう。いつも教会の働きを少数の人々だけがあまりにもたくさんの働きをするため疲れ果ててしまう信徒たちを見られないように共に努力しましょう。お互いに助け合うとすぐ終えることを助け合わないため、何人かだけがいつも苦勞する場合があります。これを当然任された人たちだけがやるべきだと思ってはいけないと思います。

偉大な使徒パウロにはテモテとルカとシラスとアリスダゴのようなすばらしい同労者たちがいました(ローマ16:3,9,21、第一コリント3:9、第二コリント8:23、ピリピ4:3、ピレモン1:1、24)。パウロは自分の同労者であるプリスカとアクラに対して“この人たちは、自分のいのちの危険を冒(おか)して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。(ローマ16:4)”

愛する信仰の家族のみなさん パウロのような偉大な伝道者にも同労者が必要でした。彼にこのような同労者がいなかったなら神の働きを偉大に全うすることはできなかつたはずで。

使徒パウロの手が届かないところで同労者である彼らは主の働きを全うしました。パウロが大変な時、大きな励ましと慰めの手となりました。自分のいのちの危険を冒してでも神の働きのため、主の教会のためにパウロを助け、共に働きました。**神様は我々にただの会社の同僚の程度でなく、兄弟姉妹神の家族となり事を望んで望まれます。その時こそ、どんな犠牲があっても、ともに愛し合い、支え合う事が出来るようになるでしょう。**

ぶどう園に先に来て働いた人は後に来た働き人と主人の働きをともにするという同労意識、共同体としての意識はありませんでした。しかし、教会の働き人たちは何よりもこの同労者信仰と意識の強い人になりましょう。周りの兄弟姉妹たちとともに主の教会を立て上げていくことを共に喜ぶ、共に助け合って共に神の栄光のため働く人たちにになりますように切に祈ります。

クリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!ぶどう園の主人に喜ばれる働き人の姿は何でしょうか。主の御体なる教会の働き人はどんな心構えであるべきでしょうか。**比較意識を警戒し、捨てなければなりません。次は、家族共同体信仰と同労者意識を持たなければなりません。計り知れない神の恵みと愛に対する負い目のある者の信仰と姿勢を忘れないことです。**

「二人は、私のいのちを救うために自分のいのちを危険にさらしてくれました。彼らには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。(ローマ人へ手紙16章4節)」

「あなたがたは同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして、私の喜びを満たして下さい。何事も自己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。」(ピリピ2章2-3節)

「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。(ガラテヤ6:2)」

主の御心にかなう働き人は自分が受けた恵みに過分だと覚え、満足する人です。いつも感謝することを忘れず捧げあrawす者です。ぐれぐれも主のために働く時、仕える時、他人と比較しないで下さい。比較する心から不平はすぐに出やすいからです。心を尽くして、ともに働く周りの信徒たちと同労者の信仰と創造信仰をしっかり持ちましょう。そして、神様の愛と恵みの負い目をもっている信仰の人としてその意識をもって教会生活をする時こそ、主の教会は主に喜ばれると信じます。残りの22年度と、来年23年度も、これからも、ともに神の国のぶどう園の働き人として、任された神の働きを全うすることにより、主にほめられ御心に適う忠実な神様の者たちらとなるクリスチャンプレイズチャーチの全信仰の家族となりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!